

リカードウ『経済学および課税の原理』出版 200 周年

——セッション組織者：佐藤有史——

2017 年は、デイヴィッド・リカードウ（1772–1823）の主著『経済学および課税の原理』が出版されてちょうど 200 年にあたる。リカードウ『原理』が経済学史上に占める位置は、1982 年にカルドアがケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』（1936）について論じた次の評言からも明らかであろう。すなわちカルドアは、ケインズの『一般理論』は、「アダム・スミスの『国富論』、リカードウの『原理』、マルクスの『資本論』ならびにアルフレッド・マーシャルの『経済学原理』に比肩しうる重要な」経済学の古典のトップ 5 にランクされることになるだろうと述べたのである（N. Kaldor, 'Limitations of the "General Theory",' *Proceedings of the British Academy* 68:259, 1982）。これは、上位 4 著作の古典的位置づけには紛れがないとの前提での話である。そして、マルクスおよびマーシャルにとってリカードウの『原理』が有した重要性にかんがみると、リカードウが理論経済学の生誕に占める位置が決定的であったことは、改めて言うまでもない。そうしたリカードウ『原理』出版 200 周年記念にあたる 2017 年度経済学史学会大会において、リカードウ『原理』にかかわる（むしろ 1 セッションにとどまるべきかどうかについては異論もあろうが）セッションを組むということは、必要であるとともに当然と目されるべきであろう。

わが国におけるおよそ 150 年にわたるリカードウ導入史や、その後の長きにわたるリカードウ研究史についてここで触れる必要はない。わが国のリカードウ研究が、その間、弛まらず着実に前進し続け、そして戦後第 5 世代とも第 6 世代とも目される研究者群によって 2013 年以降、*Ricardo on Money and Finance*, ed. Y. Sato and S. Takenaga (London, 2013), *The Reception of David Ricardo in Continental Europe and Japan*, ed. G. Faccarello and M. Izumo (London, 2014) ならびに *Ricardo and International Trade*, ed. S. Senga, M. Fujimoto and T. Tabuchi (London, 2017) 等々、諸外国の研究者の寄稿を求めつつも、わが国の研究者群によって編集された英文論文集が相次いで公刊されてきたことにかんがみても、わが国のリカードウ研究が世界の経済学史研究の最前線にあることが理解されよう。こうしたなか、『原理』刊行 200 周年にあたる 2017 年度に、わが国学界に改めてリカードウにおける理論経済学の生誕の意義を確認し、研究の継続と発展をさらにのちの世代につなげようというのが本セッションの目的である。

たかだか 1 つのセッション 3 報告では、巨人リカードウの足跡を全体的に俯瞰することは、到底不可能である。しかしながら、報告 1 は、リカードウのスミス批判の意義を、2 世紀にも及ぶ古典派経済学の発展の中に位置づけ、報告 2 では、課税の「原理」のリカードウにおける出現の意義の復元が試みられ、報告 3 は、『原理』の「魔法の 4 つの数字」ならびに「リカードウと比較優位論」に対する現代の諸研究の最前線が語られる。

これらをもって、『原理』200 周年を寿ぐ必要最低限の試みとしたいというのが我々の願いである。そして、リカードウに関する活発な応答ならびに議論をぜひとも経済学史学会諸氏に期待する次第である。

報告1 リカードウのスミス批判：擁護

佐藤有史（立教大学）

1. はじめに

わが国のスミス研究においては、リカードウのスミス価値論批判はたびたび厳しい反批判にさらされてきたようである。近年の代表的な反批判としては、例えば新村（1987）ならびに星野（2002）が直ちに想起されるだろう。だが彼らの反批判におけるスミス擁護の前提を探ってみると、新村にあっては、スミスのいわゆる「価格の加算理論」についてそれと十分な「価値決定論（相対価格論）」（新村 1987: 101）という驚くべき論拠に支えられているように思われるし、また星野（2002）にあっては、'bestowed'および'employed'の氏独特の語義に根拠をおくといういささか傷つきやすい議論の出発点に支えられていることは別にしても、氏が強調する「付加価値」の算定式が（完成品の何から原材料の何を差し引くと「付加価値」が算定できるのか、その式が）示されていないままりカードウにはスミス流の付加価値論がないという反批判が展開されていることに、いささか驚きを禁じえないのである。

リカードウのスミス価値論批判の経済学史上の意義を検討する場合、私たちは、スミスとリカードウの細部に拘泥するという近視眼的になりがちな手法に依拠する前に、「古典派経済学」の理論的核の形成という大きな枠組みを考える必要がある。そしてそうした枠組みを理解することで、私たちは、リカードウのスミス批判の経済学史的意義を再考することが初めてできるはずだというのがこの報告1の趣旨である。

2. 古典派経済学の理論的核の形成：ペティとカンティロンにおける自然価格と市場価格

マルクスは、イギリス古典派経済学は W. ペティに始まり、リカードウに終わると述べたけれども（Marx [1859] 1970: 52/訳 57 頁）、もし私たちが古典派経済学の価値論の核には「自然価格と市場価格」という理論的枠組みがあったということを認めるならば、私たちはこの枠組みがペティから明確に始まっていることを確認することができるのである。

もしある人が、1 ブッシェルの穀物を生産できるのと同じ時間内に、ペルーの大地から銀 1 オンスをロンドンに持ってくることができるとしよう。この場合、一方は他方の自然価格（natural price）である。さて、新しくもっと容易な鉱山のおかげで、以前は 1 オンスを獲得したのと同じくらい容易に 2 オンスの銀を獲得できるとすれば、その時には、他の条件にして等しい限りにおいて、穀物は、1 ブッシェルが 10 シリングになっても、以前に 1 ブッシェルが 5 シリングであったのと同じくらい安価であるということになるだろう。（Petty [1763] 1899: 50–51/訳 89–90 頁. 強調は追加）

しかし、ほとんどすべての商品にはその代替物すなわち代用物があるということ、またほとんどすべての物にはいくつの用途があるかもしれないし、さらに目新しさ、驚き、上流の人々の手本や、分析しようもない効果についての評価のために、物の価格は騰落するので、われわれは、上述の永続的な諸原因（permanent Causes）に、これらの偶然的な諸原因（contingent Causes）を加えなくてはならない。これらのことについて、賢明に予見したり計算したりすることにこそ、商人というものの美德が存するので

ある。(ibid., p. 90/訳 156 頁. 強調は追加)

ペティは、こうした技術的条件によって決定される natural price 概念を『租税貢納論』で3度用い、それに対して偶然的原因によって現出する「現実の価格」を区別した。そして何よりペティが、経済学(ペティは‘political œconomies’, ‘œconomicks’という用語を使った)の分析対象として、「永続的な諸原因」により決定される「自然価格」を指定したことこそが大変重要なのであって、そしてペティの自然価格概念はカンティロンに継承されたのだ。

なるほど、スミスはペティを引用することはなかった。ゆえにスミスのペティ無視は「アダム・スミスの犯罪」(馬場 2008)だと告発する向きもあるが、だがしかし、経済学史的には、スミスはペティを読んだカンティロンを読んだという事実のほうが重要である²⁾。

サー・[ウィリアム・] ペティ氏は・・・土地と労働との等式による、この平価の関係を政治算術上の最重要問題と考えている。だがこの研究は彼がついでに触れただけのものであって、風変わりで、しかも自然の規則からもかけ離れたものである。それはもっぱら彼が事柄の原因や原理に取り組みず、ただ結果にのみ拘泥したためである。(Cantillon [1755] 1931: 43/訳 29 頁)

そしてカンティロンは、彼のいう内在価値(自然価格)が生産の技術的条件によって決まる生産費(costs/des frais)であることを明らかにしつつ(ibid., p. 113/訳 74 頁)、以下のよう¹⁾に内在価値(自然価格)と市場価格についてまとめるのである。

物の価格あるいは内在価値はその生産に入り込む土地と労働の量の大きさであり、それには地味あるいは土地の生産物と労働の質とが考慮に入れられる。だが多くの物が実際にはこのような内在価値を持っていないが、しばしば市場では、その価値どおりには売られないことが起こる。これは人々の気分や気紛れや好みや、人々の行なう消費のいかんによるものであろう。・・・物の内在価値は決して変動しない。しかし商品や物産の生産を、それらの一国内での消費につり合わせる事が不可能であるために、市場価格の毎日の変動と止むことのない高下の波動とが生じるのである。しかしながら、きちんと整った社会では、その消費がかなり恒常的で不変であるような商品や物産の場合、それらの市場価格が内在価値から大きく離れることはない。(ibid., pp. 29, 31/訳 20, 21 頁. 強調は追加)

こうして、<自然価格=技術的条件=永続的>、<市場価格=偶然的原因=一時的>という古典派経済学の理論的核が出来たのである。

3. 『国富論』第1編の白眉：第7章「自然価格と市場価格について」

スミスは、ペティ=カンティロンによって形成された自然価格と市場価格という枠組みを確固なものとし、それを後世に古典派経済学の理論的核として遺したのである。まさにスミスのおかげで、この理論的核はイギリス古典派のものとなったのだ。

1) 私の主張は、ロンカッリアのもの(Roncaglia 1985: 72-88/訳 113-134 頁)を単純明快にしてある。

2) スミスはカンティロンの『商業試論』初版を所有していた。また、グラスゴウ大学図書館は、1756年に『試論』の第2版を購入した(Scott 1937: 345 fn.2)。スミスは『国富論』で一度だけカンティロンに言及した(第1編第8章)が、『国富論』全体、また1762-64年の一連の講義でも、広範にカンティロンを援用した。カンティロンの『試論』は、1880年に至るまでイギリスでは大変な稀覯本であった。

それゆえ、自然価格というのは、いわば中心価格であって、そこに向けてすべての商品の〔市場〕価格が絶えず引き付けられるものなのである。さまざまな偶然の事情 (accidents) が、時にはこれらの商品価格を中心価格以上に高く釣り上げておくこともあるし、また時にはいくらかその下に押し下げることもあるだろうが、このような静止と持続の中心 (this center of repose and continuance) に落ち着くのを妨げる障害が何であろうと、これらの〔市場〕価格は絶えずこの中心に向かって動くのである。(Smith [1776] 1976: 75/訳①99 頁. 強調は追加)

私たちは、リカードウが『国富論』第1編第7章を激賞し、そしてスミスの自然価格論をまさに彼の価値と分配の理論の核におこうとしたという事実を忘れてはならないのだ。

『国富論』[第1編]第7章では、この問題〔市場価格の自然価格への収斂〕に関するすべての事が最も見事に論じられている。・・・そこで、諸商品の交換価値、すなわちどれか一つの商品がもつ購買力について論ずる際には、私は常に、何らかの一次的または偶発的な原因 (any temporary or accidental cause) によって妨げられない場合に、その商品がもつであろう力のことを言っているのである。そしてそれが、その自然価格なのである。(Ricardo [1817] 1951: 91-92/訳①, 134 頁. []と強調は追加)

4. リカードウのスミス批判 (1)

ところがスミスは、そうした自然価格と市場価格という自らの主張にかなう価値論を展開できなかったと批判し、そしてそうした批判を通じてより完全な自然価格論を完成させたのが、リカードウのスミス批判の内実である。リカードウは、①価値尺度を間違えて支配労働にしてしまったこと、②自然価格を賃金、利潤、地代という3つの構成要素をバラバラに足し算したものだと思なしたこと、以上の点にスミス価値論の瑕疵を見たが、つまるところ、③素晴らしい『国富論』1編第7章は、その前後の諸章のために台無しにされている、というのがリカードウのスミス批判の要諦である。そうしたリカードウのスミス批判の内容を確認する前に、ここであらかじめ、スラッフアによるスミス『国富論』とリカードウ『原理』との各章対応表を確認しておこう。

スミス『国富論』第1編	リカードウ『原理』第2, 3版
第5章 商品の実質価格と名目価格について	第1章 価値について
第6章 商品の価格の構成部分について	
	第2章 地代について 第3章 鉱山の地代について
第7章 商品の自然価格と市場価格について	第4章 自然価格と市場価格について
第8章 労働の賃金について	第5章 賃金について
第9章 資本の利潤について	第6章 利潤について
第10章 労働と資本の異なった用途における賃金と利潤について	
第11章 土地の地代について	
	第7章 外国貿易について

(出典) Ricardo [1817] 1951: xxiv.

表1 『国富論』と『原理』の理論編の各章対応表

リカードウが、スミスが自然価格論を台無しにしていると感じた、スミスの相対価格決定論と価値尺度論との関連をまとめてみよう。

(1) 商品*i*に投下された労働時間を*H_i*とし、その価格を*p_i*、賃金率を*w*とすると、スミスによれば、資本蓄積も土地の占有もなかった「初期未開社会」においては、商品の価格を構成するのは*H*時間の労働に支払われる賃金*wH*だけだから、諸商品の交換比率は、

$$\frac{p_2}{p_1} = \frac{wH_2}{wH_1} = \frac{H_2}{H_1} \quad \dots \dots \dots \textcircled{1}$$

すなわち、投下労働量の比に等しい (Smith [1776] 1976: 65/訳①80 頁)。

(2) だが資本が蓄積され土地が占有されるようになると、商品価格は、賃金*W*、利潤*Π*、地代*Λ*という3つの構成要素を加算したものとなる (adding-up theory of price)、とスミスは言う。すなわち、

$$p_i = W + \Pi + \Lambda = wH_i + \Pi + \Lambda \dots \dots \dots \textcircled{2}$$

ゆえに、賃金率*w*で両辺を割ると、

$$\frac{p_i}{w} = H_i + \frac{\Pi + \Lambda}{w} \quad \dots \dots \dots \textcircled{3}$$

すなわち、 $\Pi + \Lambda > 0$ である限り、文明社会においては支配労働 ($\frac{p}{w}$) > 投下労働 (*H_i*) になるというのである (Smith [1776] 1976: 71/訳①92 頁; cf. Naldi 2013: 299–302)。

(3) しかしリカードウによれば、こうした資本主義経済についてのスミスの説明は誤りである。なぜなら、もし地代が諸商品の生産費には入らないとしたら、諸商品の利潤を含む生産費は次のようになる。

$$p = wH + \Pi \quad \dots \dots \dots \textcircled{4}$$

よって、利潤率*r*は、

$$r = \frac{p - wH}{wH} \quad \dots \dots \dots \textcircled{5}$$

ところで、各部門間で競争の結果、利潤率が均等化しているとし、この利潤率を*r**で表すと、商品1と商品2の相対価格は、利潤が存在しても、それぞれの投下労働量の比率で決まるのである。

$$\frac{p_2}{p_1} = \frac{(1+r^*)wH_2}{(1+r^*)wH_1} = \frac{H_2}{H_1} \quad \dots \dots \dots \textcircled{6}$$

非賃金財が資本に含まれる場合は、次の単純なケースを考えてみよう。商品1では総投下労働*L₁*のうち半分を前期に生産手段*k₁*を生産するために用い、今期は残り半分の直接労働と*k₁*とで商品1を生産するとしよう。すると、商品1の生産費は、

$$p_1 = (1+r) \left(w \frac{L_1}{2} + k_1 \right) = (1+r)w \frac{L_1}{2} + (1+r)^2 w \frac{L_1}{2} \quad \dots \dots \textcircled{7}$$

となり、生産手段が労働費用に還元されることが示され、商品2でもその総投下労働*L₂*を同様に分割して用いるとすると、同様の生産費モデルができるので、このとき*p₂/p₁* = *L₂/L₁*となり相対価格は投下労働量の比に等しい³⁾。ここでは、①2つの商品の生産期間が

³⁾ こうした「日付のある労働量への還元」手続きは、『原理』第1章のみならず、第31章「機械論」においても採られている。

異なる場合、②2つの商品の資本構成が異なる場合という、拡張された「日付のある労働」への還元問題に踏み込む必要はないだろう。

5. リカードウのスミス批判（2）

さて、そもそも、なぜ地代 Λ は生産費から消去できるのか？ それを証明するのが、リカードウの著名な「差額地代」の理論である。

- <理論的前提> {
1. 資本家は平均利潤を取得できる限りで、農業生産を実行する。
 2. 実質賃金は所与とする。

<差額地代の原理>

地代は生産費（自然価格）には入らない。地代は価格の結果であり、原因ではない。

ド・クインシー（De Quincey 1844）は、リカードウの価値論と地代論は2つ合わさってスミスの価値論批判をなしていると、その限りできわめて正確に述べていた。リカードウの『原理』の画期は、穀物価格が最劣等地での生産費 $p = (1+r)wL$ によって決定されることを示したことだ⁴⁾。こうした差額地代の原理は、以下のド・クインシー＝カルドア＝パシネッティ・モデルによって簡便に示されることは周知であろう（ただし、パシネッティは農業部門と金生産部門という2部門モデルにしている点で、またド・クインシーは残念なことに地代表の計算で考え違いをしている点で、リカードウ『原理』とは異なるが）。

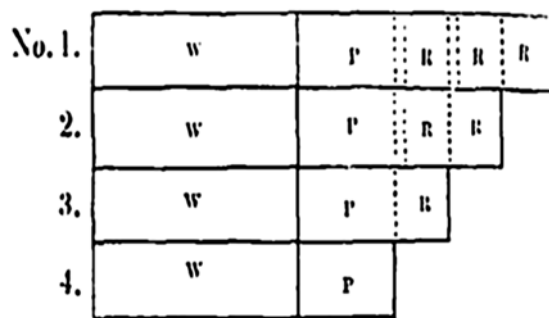


図1 ド・クインシー・モデル
(出典)De Quincey 1844: 172.

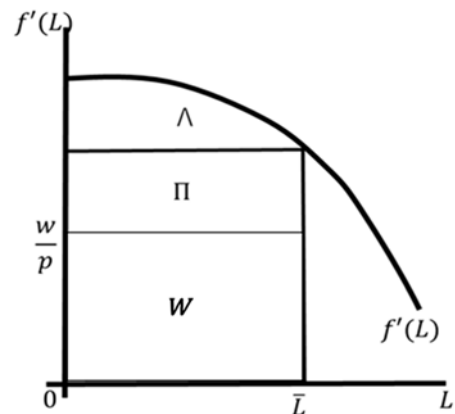


図2 カルドア＝パシネッティ・モデル
(出典)Pasinetti 1977: 11/訳 14 頁.

地代は $\Lambda = \int_0^{\bar{L}} [f'(L) - \bar{L}f'(\bar{L})] dy = f(\bar{L}) - \bar{L}f'(\bar{L})$ で与えられ、穀物1単位の価格 p は、 \bar{L} 人の労働の投下が平均利潤を伴って回収されなくてはならないから、 $pf'(\bar{L})\bar{L} = (1+r)w\bar{L}$ を満たさなくてはならない、つまり、穀物価格は地代を生まない耕境の生産費 $p = \frac{(1+r)w}{f'(\bar{L})}$ で決定されるのである。ゆえに、地代は生産費に入らない。

⁴⁾ 『利潤論』(1815)には最劣等地での穀物の生産費の理論がなかったため、実は『利潤論』には差額地代の理論はなかったと言わなくてはならない。

6. おわりに

リカードウのスミス批判を通じての価値論の再構築は、ペティ以来の古典派経済学の夢を、それゆえスミスの夢を、かなえた。というのは、自然価格が一時的・偶発的な諸原因のために不断に騰落する市場価格の中心になることを論証するにあたって、リカードウは、諸商品の相対価格は、永続的な技術的条件で決まる生産費の比、それゆえ投下労働量の比によって決定され、これを満たすように経済の諸変数は調整されることを、そして自然価格とはまさに「貨幣タームでの生産費 (money cost of production)」(Ricardo [1817] 1951: 283/訳②234 頁) にほかならないことを、私たちに完璧に示したからである。

参考文献

- Cantillon, R. ([1755] 1931) *Essai sur la nature du commerce en général*, ed. H. Higgs. London: Macmillan. 津田内匠訳『商業試論』名古屋大学出版会, 1992.
- De Quincey, T. (1844) *The Logic of Political Economy*. Edinburgh and London: William Blackwood and Sons.
- Marx, K. ([1859] 1970) *A Contribution to the Critique of Political Economy*, trans. S.W. Ryazanskaya. London: Lawrence & Wishart. 武田隆夫ほか訳『経済学批判』岩波文庫, 1956.
- Naldi, N. (2013) 'Adam Smith on value and Prices.' In *The Oxford Handbook of Adam Smith*, ed. C.J. Berry, M.P. Paganelli and C. Smith. Oxford: Oxford University Press, pp. 290–306.
- Passinetti, L.L. (1977) *Lectures on the Theory of Production*. New York: Columbia University Press. 菱山泉ほか訳『生産理論』東洋経済新報社, 1979.
- Petty, W. ([1762] 1899) *A Treatise of Taxes and Contributions*, as reprinted in vol. 1 of *The Economic Writings of Sir William Petty*, ed. C.H. Hull, 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press. 大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』岩波文庫, 1952.
- Ricardo, D. ([1817] 1951) *On the Principles of Political Economy, and Taxation*, as vol. 1 of *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. P. Sraffa with the collaboration of M. Dobb, 11 vols. Cambridge: Cambridge University Press. 羽鳥卓也・吉澤芳樹共訳『経済学および課税の原理』全2巻, 岩波文庫, 1987.
- Roncaglia, A. (1985) *Petty: The Origins of Political Economy*. Cardiff, U.K.: University College Cardiff Press. 津波古充文訳『ウィリアム・ペティの経済理論』昭和堂, 1988.
- Scott, W.R. (1937) *Adam Smith as Student and Professor*. Glasgow: Jackson, Son & Company.
- Smith, A. ([1776] 1976) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. R.H. Campbell and A.S. Skinner, 2 vols. Oxford: Oxford University Press. 大河内一男監訳『国富論』全3巻, 中公文庫, 1978.
- 新村 聡 (1987) 「リカードのスミス価値論批判」『岡山大学経済学会雑誌』19(1):75–101.
- 馬場 宏二 (2008) 「アダム・スミスの犯罪—労働価値説史の錯綜—」『大東文化大学経済論集』90(3): 43–60.
- 星野 彰男 (2002) 『アダム・スミスの経済思想』関東学院大学出版会.

リカードウの課税の原理[†]

久松太郎（同志社大学）

若松直幸（神戸大学・院）

I はじめに

デイヴィッド・リカードウによって 200 年前に世に送り出された *On the Principles of Political Economy, and Taxation* (1817 年) は、その後の経済学の展開に大きな足跡を残すこととなった。通常『経済学および課税の原理』（以下、『原理』と略記）と訳されるこの著書は大きく、経済理論、課税、その他（従来の経済学説に対する批判など）という 3 つのパートで構成されている。経済理論に関する研究は、価値、分配（資本蓄積・経済成長を含む）、貿易など、汗牛充棟である。その他のパートに関する研究においても、機械論を中心に重要な成果が出されてきた。その一方で課税のパートは、それが『原理』に占める紙幅の割合を勘案してみると、必ずしも十分な研究蓄積があるとはいえないように思われる。実際に、リカードウの経済理論を中心に扱った研究書籍は多数公刊されているのに対して、彼の租税論を題材として包括的に論じた書籍は、半世紀以上も前に上梓された Shoup (1960) のみである¹。このことは、Shoup (1960) をもってリカードウ課税論研究が完結したことを意味するわけではなく、その後も、いくつかの重要な研究（佐藤 1962, Hollander 1979, Dome 2004, 佐藤 2005）が出来てきた事実を無視してはならない—もともと経済理論研究と比較するとその数は圧倒的に少ないが。

本報告は、リカードウ租税論を今後も再考する意義はあるのかという問いを立てたうえで、もし意義があるとすればどのような視点からそれを再考すべきかを示す。これをなすために、リカードウ本人が租税論をどのような視点・方法で論じようとしていたのかを明らかにする。本報告が『原理』（初版）出版 200 周年の記念セッションの一部であることを考慮し、リカードウ租税論における特定項目の詳細な解説を省略することを予め断っておく。

II リカードウ租税論に関する 4 つの問題

本報告の主題に先だって、リカードウ『原理』の租税論に関する 4 つの問題——(1)『原理』のなかに「課税の原理」は存在するか、(2)『原理』における課税に関する諸章の編成はスミス『国富論』を継承したものか、(3) リカードウ租税論は財政学史において検討されるべき理由をもつか、(4) リカードウ租税論は実際の英国税制と照合して分析したものであったのか——に注目し、先行研究を整理しておく。

[†] 本報告は、久松太郎の研究プロジェクト「リカードウ財政論に関する研究」（神戸大学）において若松直幸をリサーチアシスタントとして雇用し、共同研究を行ったものの一部である。

¹ リカードウ財政論研究としては、Churchman (2001) がある。Shoup (1960) 以前の主な研究としては、St. Clair (1957) や中村 (1959) がある。

1 「課税の原理」の存在

『原理』は、1817年の初版出版以降、1819年、1821年と3つの版を重ねた。よく知られているように、リカードウの生前に上梓された本書のタイトルをみると、*the Principles of Political Economy* と *and Taxation* の間にコンマが入っていることがわかる。森嶋は、その事実に着目して、『原理』には「課税の原理」はなく、課税の諸章は「経済学の原理」の応用にすぎないのであって (Morishima 1984: 4)、邦訳名を『経済学と課税』とする方が適切であるとした (森嶋 1994: 25)。

他方、『原理』(第2版)日本語版の訳者のひとりである羽鳥は、リカードウが『マルサス評注』のなかで「課税の原理」という言葉を使っていたことを指摘し、『原理』における「課税の原理」の存在を主張した。こうして、邦訳名は『経済学および課税の原理』とされたのである。羽鳥はまた、課税問題は「経済学の原理」の「最も完全な知識」に基づいて論じられるというリカードウの主張(1819年11月12日付のトラワ宛書簡; RW VIII: 132-3)に注目し、「課税の原理」を「経済学の原理」の「応用領域」に位置付け、「純粹理論を政策論ないし政策批判へと媒介する不可欠の環」とみなした(羽鳥 1987, 295-8)²。

2 租税論の章別編成

Sraffa (1951: xxiii, xxv) は、リカードウ『原理』の(狭義)課税論を構成する第8章から第18章と、スミス『国富論』の租税論を構成する第5編第2章第2節との間に、以下の表に見られるような類似性があることを指摘した。

表 Sraffa (1951) 解釈

『国富論』第5編第2章第2節	『原理』第2・3版
前書き 租税とは	第8章 租税とは
	第9章 原生産物税
第1項 賃料税 地代税 土地生産物税	第10章 地代税 第11章 十分の一税 第12章 地租 第13章 金に対税 第14章 家屋税
家賃税	第15章 利潤税
第2項 利潤税 特殊な職業の利潤税	
第3項 賃金税	第16章 賃金税
第4項 各種収入に無差別にかかる租税 人頭税 消費税	第17章 非原生産物税 第18章 救貧税

² 大淵 (2008: 62) は、『原理』に「課税の原理」の存在を認めつつも、それは「必要で十分な課税の原理を含んでいない」という。

Sraffa (1951) の解釈は基本的に多くの研究者 (佐藤 1968, 羽鳥 1994, 中村 2009) からの支持を得たが, 佐藤 (2005) はスミスとリカードウの章別構成における若干の違いに注目し, リカードウがスミスの編成を単純に継承したという説に疑問を呈した. スミス租税論は「収入」という現実の英国税制を反映した枠組みを軸に編成されているが, リカードウ租税論は, 租税が「収入」だけでなく「資本」からも支払われることに留意して, 「収入」の項目を後退させ「租税の資本蓄積構造への作用」を含意した編成となっていると解釈された (佐藤 2005: 7-10).

3 財政学史におけるリカードウ租税論

リカードウ自然価格体系に各種租税を組み入れてモデル分析を行った Dome (1992) は, 課税が資本蓄積 (経済成長・経済発展) に悪影響をもたらすことをとらえて, 課税反対論者としてのリカードウ像を強調した. しかしながらこのモデル分析では, 資本蓄積と経済成長の理論に深く関わってくる差額地代説が明示的に示されていなかった.

他方で, 経済発展に対する課税の是非を議論することのみが財政学上の問題ではない. また資本主義社会の存続のためには, 国家の存在は現実的に不可欠である. このように考えた中村 (1959: 285-6) は, 租税の問題を, それが国家サービスに必要不可欠なものとみなした段階で議論したリカードウを高く評価し, 彼の租税論は「財政学上の批判を受けるに値する」と主張した.

4 リカードウ租税論と実際の英国税制

Shoup (1960: 80-1, 93, 102, 207) は, リカードウが資本蓄積に貢献しない地主の仮定や当時の英国税制には存在しなかった原生産物税と金税の分析, 金税の利潤税への応用分析など, 非現実的な議論を展開していることを指摘し, 現実的想定や実際の税制を十分に考慮に入れなかったリカードウの分析を消極的に評価した (Cf. 中村 1960, 和田 1963).

これに対して佐藤 (1962: 33) は, 原生産物税を利潤税の枠組みで捉え直すことができることなどを指摘し, リカードウが当時の英国税制の実際問題に関心を示さなかったという解釈を棄却した. また真実 (1989: 128) は, 課税や財政に関する議論を政治に応用したリカードウを (「単なる理論家」ではなく) 「進歩的政治経済学者」として積極的に評価した.

これら対立する 2 つの見解は, リカードウ租税論が実際の英国税制を十分に考慮して論じられているのであれば積極的な評価が与えられるという前提の下で提起されたものである. しかしながら, リカードウ租税論は現実社会・実際問題と関係していなければならないということ正当化する理由はあるだろうか. そもそも, リカードウ本人は, 租税論を実際問題として論じようと意図していたのであろうか.

III リカードウの租税分析の方法と視点

経済学クラブの会員であったマレットは, リカードウの『原理』を「厳密な数学的分析によって抽象的に推論できる人でない限り読むことができない, ほとんど封印された書物」とみな

した（1831年1月13日付の日記；Mallet 1980 [1921] IV: 224）。リカードウの弟モーゼズは、『原理』では「少数の明確な原理から一連の議論が導き出され、数学的な正確さをともなってその結論が証明されている」（RW X: 10）と語った。友人のブルーアムは、「他の惑星から降臨してきた」リカードウの主張は「実際にしばしば理論倒れであって、ときには彼の聴衆にとってはあまりに洗練されていて、ときおり行きすぎであった」と評した（RW V: 56, xxxiii）。

リカードウの「経済学の原理」が抽象的な推論でもって展開されていることは周知の事実であるが、「課税の原理」もまた抽象的かつ理論的な視点と方法で論じようと思図されていたのである。「課税の問題」を実際問題として取り扱うのではなく、むしろ「ひとつの首尾一貫した理論（a consistent theory）」（RW VII: 84）として抽象的に論じようと思図していたリカードウは、マルサスの『経済学原理』を読了した後に、次のような所見を述べている。

私たちが長く意見を異にしてきた[租税論を含む]諸問題について、私はあなたの主張に納得できませんでした。あなたが拙著[『経済学および課税の原理』]を私が意図した以上に実際的な（practical）ものだと考えておられるところに、私たちの意見の相違があるようにも思われます。私の目的は原理を明らかにすることでした。そのために私は、顕著な場合（strong cases）を想定してこれらの原理の作用を示そうとしました。

（1820年5月4日付のマルサス宛書簡；RW VIII: 183-4）

リカードウは、終生、課税の問題を実際的なものとして論じる意図をもち合せていなかったようである。『原理』第3版（1821年）が出版された後に、トラワは次のような文面を手紙にしたためた。

原理に関して言いますと、この問題はもはや解決済みであるとの感を抱いております。もともと、多くの細かい点については何人かの論者によって未だに論争されていますが、しかし私は、こうした原理が課税の実際的な運用に広く応用されたものを見てみたいと思っております。私たちがいま欲しているのは、政治家が自らの財政上の業務をこなす際に直ちに参照できる教科書なのです。租税が確固たる原理にもとづいて賦課されたことはこれまでありませんでしたし、それどころか、大部分の租税はどの原理ともあいりませんでした…。わが国の財布のひもを再び締めなくてはならない時がやってくるでしょう。わが国の資源を使う最善の方法について、知識を準備しなければなりません。このような任務を行える適任者をあなた以外に知りません。

（1821年9月13日付のリカードウ宛書簡；RW IX: 68-9；傍点は原文強調）

リカードウは「政治家が自らの財政上の業務をこなす際に直ちに参照できる教科書」を書いたことも、書こうともしなかった。

現在理解されている経済学の原理が課税の実際的な運用に応用されたものを、私も見てみたいも

のです。そのような著作が現れるのもそれほど遠くはないでしょう。…私がそのような重要な著作をうみ出せるとお考えのようですが、それは大きな間違いです。

(1821年10月4日付のトラワ宛書簡；RW IX: 87-8)

このようにリカードウ本人は、もとより租税論を実際問題として論じようとは意図していなかったし、抽象的かつ理論的に租税の問題を検討することで『原理』における租税論を完結させようとしていたのである。したがって、実際の税制を十分に考慮して論じられている（いない）のであれば積極（消極）的な評価が与えられるという前提の下でリカードウ租税論を評価しても有益な結論が得られないように思われる。むしろリカードウが仮想した理論上の税制度が、差額地代説を考慮に入れた経済成長のモデルにおいていかなる効果を与えるのかを分析することが求められるであろう。

租税論研究における差額地代説の重要性は、『原理』序文における以下の文章から了解されるであろう。

1815年、マルサス氏は『地代の本質と増進に関する研究』において、オックスフォードのユニヴァーシティー・カレッジのフェロー[ウェスト]は『土地への資本投下に関する試論』において、ほぼ同時に真の地代学説を公表した。この学説を知らなければ、…課税が社会のさまざまな階級に及ぼす影響を十分に追跡することはできない。…アダム・スミス他の先述の有能な論者たち[テュルゴー、ステュアート、セー、シスモンディ]は、地代の原理を正しく考察していなかったために、地代の問題を完全に理解して初めて発見できる多くの重要な真理を見逃したように思われる。この欠陥を埋めるには、本書の著者がもっているよりもはるかに優れた才能が必要である。しかし著者は、問題の考察に最善を尽くし、先述の優れた論者たちの著作から助けを借り、数多くの出来事が生じたここ数年間が現代人に与えた貴重な体験を積んだうえで、…租税の作用に関する私見を述べるので、出過ぎたことはやっていないと思う。著者が正しいと考える原理が承認されるのであれば、この原理を追究してそのすべての重要な帰結を引き出す仕事は、著者よりもはるかに有能な誰かがこなしてくれるであろう。

(RW I: 5-6)

IV 結びにかえて

租税は原則として悪しき制度である。しかし、租税は資本主義国家の存続には不可欠である。租税をどのような組み合わせで、どの程度付加すべきであるか。リカードウは、租税論を実際ではなく理論的に検討することを通じて、このような問題に取り組もうとしていたのではないだろうか。そして彼は、経済学の原理を実際の税制の運用に応用してくれる有能な経済学者³の出現を切望したのである。

³ リカードウは、マルサス『経済学原理』に課税に関するまとまったパートがなかったことを大変遺憾に感じていた（RW VIII, 130-31, 132-3）。経済学の原理を実際の税制の運用に応用してくれる有能な経済学者としてリカードウの脳裏に浮かんでいた人物は、マルサスだったのかもしれない。

リカードは、租税を実際問題として扱うのではなく抽象的な次元で論じることを意図し、それを理論的一貫性のある原理として提示しようと考えていた。また、経済成長の過程で租税が社会の諸階級に与える影響を適切に分析するには、差額地代説が必要とされる。したがって、差額地代説を考慮に入れた経済成長のモデルにおいて、理論上の税制度がいかなる効果を与えるのかを分析することが要求されうるのであろう。管見の限り、このような分析の視点をもった十分な研究はないように思われる。リカード租税論の再考の余地はなお残されているといえるだろう。

参考文献⁴

- Churchman, N. 2001. *David Ricardo on Public Debt*. New York: Palgrave.
- Dome, T. 2004. *The political economy of public finance in Britain 1767–1873*. London: Routledge.
- Dome, T. 1992. "Ricardo's Theory of Tax Incidence: A Sraffian Re-interpretation." *Cambridge Journal of Economics*. 16 (1): 43–53.
- Morishima, M. 1989. *Ricardo's Economics: A General Equilibrium Theory of Distribution and Growth*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mallet, J. L. 1980 [1921]. "Diaries—J. L. Mallet." In *Political Economy Club founded in London 1821, Vol. 6, Minutes of Proceedings, 1899-1920; Roll of Members and Questions Discussed, 1821-1920: with Documents Bearing on the History of the Club*. London: Macmillan.
- Ricardo, D. 1951-73. *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by P. Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb. 11 vols. Cambridge: Cambridge University Press. (RW)
- Shoup, C. S. 1960. *Ricardo on Taxation*. New York: Columbia University Press.
- Sraffa, P. 1951. "Introduction." In RW I.
- St. Clair, O. 1957. *A Key to Ricardo*. London: Routledge & Kegan Paul.
- 佐藤滋正. 2005. 「リカード課税論の理論圏」『経済情報論集』(尾道大学) 5 (2): 1–23.
- 佐藤 進. 1962. 「ナポレオン戦後の財政とリカードの租税論」『武蔵大学論集』10 (1): 1–34.
- 中村一雄. 1959. 「リカードの経済学と租税論」『神戸大学経済学研究年報』6: 277–312.
- 中村一雄. 1960. 「書評 C. S. Shoup: Ricardo on Taxation」『国民経済雑誌』101 (5): 99-106.
- 森嶋通夫. 1994. 『思想としての近代経済学』岩波書店.
- 和田重司. 1963. 「C. S. Shoup; Ricardo on Taxation—リカード経済学における基礎理論と租税論との関連を中心に」『一橋研究』10: 47-52.

⁴ その他の参考文献については当日配布します。

リカードウ貿易論の現在

『原理』第7章でリカードウは「比較優位の原理」を展開したのか？

田淵 太一（同志社大学）

I. はじめに

『経済学および課税の原理』（以下、『原理』と略称）刊行200周年が近づく中、リカードウ経済学研究は、とりわけ貿易論の研究においてめざましい展開を遂げている。

本年に刊行される Senga *et al.* eds. (2017) および Shiozawa *et al.* eds. (2017) の2つの論文集は、リカードウ貿易論にかんする新たな知見に触発されて展開された議論を収録している。

本報告では、リカードウ貿易論をめぐる近年の論争を概観して論点を整理し、今後に残された課題は何なのかについて問題提起を行いたい。

II. 「4つの数字」の意味

「貿易論」および「国際経済学」の事実上すべてのテキストブックに記載されている「リカードウ・モデル」は、今日なおリカードウ貿易論の標準的解釈としての地位を占めている。そこでは、リカードウが『原理』第7章で用いた設例（P. サミュエルソンが名づけた「4つの魔法の数字」Samuelson 1969）が、2国2財モデルにおいて、各財1単位の生産に必要な労働量（単位当たり労働投入係数）を示すものと解釈される。両国それぞれにおいて、労働投入係数の比が、アウトタルキー価格（貿易以前の国内相対価格ないし機会費用）を表わす。労働を唯一の生産要素とする一要素経済、および固定係数の仮定により、生産可能曲線は線型となり、貿易開始後、両国ともに完全特化という結果が生じる（片方の国が「大国」である場合を除く。その場合、「大国」は不完全特化となる）。交易条件は相対供給と相対需要により両国のアウトタルキー価格の間で決定される。「大国」のケース、および交易条件がたまたま片方の国のアウトタルキー価格に等しくなる場合を除いて、両国に必ず貿易利益が発生する。

テキストブックの標準的解釈に立脚する現代の論者は、そこから逆にリカードウの論理の不十分さを批判する。たとえば、貿易理論史にかんする有力なサーヴェイを行なった J. チップマンは、リカードウによる「4つの数字」の叙述を「不合理な推論 *non sequitur*」として批判する。「この法則にかんするリカードウ自身の論述は、まったくもって舌足らずであり、彼がそれを本当に理解していたか疑わしくなるほどである」（Chipman 1965: 479-80）。

しかしながら、今世紀に入って、こうした標準的解釈を覆す研究が国際的に注目されている。R. ラフィン（Ruffin 2002）ならびに A. マネスキ（Maneschi 2004）によって、「4つの数字」をめぐる新しい解釈が提示された。従来の標準的解釈では、「4つの数字」は財1単位当たりの労働投入係数を示すものと解釈されてきたが（表1はその一例）、ラフィンはこれを否定し、現実に交易されている特定量の財に必要な労働量であることを示した（表2）。貿易利益にかんする複雑な論証は不要であり、「4つの数字」のうち2つの数字どうしの引き算によって「18世紀ルール」と同様、「労働の節約」という貿易利益が算出され

る。ラフィンによれば、スラッファ(Sraffa 1930)もまたこうした理解を示唆していた。マネスキはこの新解釈を「スラッファ＝ラフィン解釈」と命名した。この新解釈に伴い、「比較優位の原理」の発見者はトレنزでなくリカードウであったこと、標準的解釈への再構成を行ったのはJ. S. ミル (Mill 1844, 1848) であったことが主張された¹⁾。

Ⅲ. リカードウ貿易論における貨幣と国際価値への注目

ラフィンとマネスキ以降に展開された議論の中でとりわけ注目に値する業績は、G. ファッカレロ (Faccarello 2015a, b)、ならびに塩沢由典 (2014) である。

ファッカレロは、ラフィンたちの議論の対象が『原理』第7章のわずか15%を占めるにすぎない「4つの数字」の部分に限定されているうえに、実物タームのみに着目する伝統的(＝新古典派的)解釈にとらわれていることを批判し、リカードウ貿易論の再解釈をさらに進めて、第7章後半の貨幣にかんする議論や『原理』全体、さらにはリカードウの他の諸著作をも視野に入れた注目すべき読解を示した²⁾。ファッカレロによれば、リカードウにとって国内取引と国際取引の間に重要な差異はなく、すべての取引はマイクロ主体による個別の貨幣的交換であり、それゆえ「貿易利益」は意図せざる結果にすぎず、「比較優位の原理」は貿易パターンを説明できない。

他方、塩沢 (2014) は、中間財貿易を想定し技術選択を導入する多数国多数財モデル(「リカード・スラッファ貿易経済」)で、 M 国 N 財($M < N$)場合に、国際価値(賃金率体系と価格体系)が一義的に定まることを数学的に証明した³⁾。この一般的なケースにおいては、「比較優位の原理」は貿易の説明のために何の役割も果たさない。

塩沢は、これまでの貿易理論の発展を「2国2財」モデルの「端点」における生産量固定のもとでの価格調整という特殊な状況に限定してきた責任はJ. S. ミル (Mill 1844, 1848)にある、とする。塩沢の強調点は、テキストブックの「リカード・モデル」で通常理解されているのとは反対に、リカードウが『原理』において国際価値論(交易条件決定論)を提示することができなかったという点にある。『原理』第7章でリカードウはこう述べた。

「1国において商品の相対価値を規定するのと同じ法則が、2国あるいはそれ以上の国のあいだで交換される商品の相対価値を規定するわけではない」(Works, I: 133)。J.S.ミルはこの交易条件不確定問題を「相互需要説」という形で「解決」してみせた。後にJ.S.ミルによる「解決」に不満をもったマルクスも、国際価値論を構築することができず、『資本論』第I巻の「賃金率の国民的相違」を論じた章で、「国際的適用においては、価値の法則はなおさら根本的に修正される」と書き残しただけであった。リカードウが提起し、マルクスも問題にした国際価値論は、古典派価値論の「欠けた環」であり、この問題が解決できないために古典派価値論は完結しなかったとされる。

塩沢によれば、交易条件の不確定問題を基点として、J.S.ミルが引き起こした経済学の転回こそが、古典派経済学・新古典派経済学の二大潮流を分かち決定的な分岐点となった。J.S.ミルは、リカードウの忠実な後継者たらんとして古典派価値論(生産費説)を擁護しようとしたが、価値法則(生産費の法則)がそのままでは成立しない国際貿易にかんして「より一般的な法則として存在する需要供給の法則に従うべきであろう」として、生産費説にかえて需要供給説を国際価値論として導入した。その際にJ.S.ミルが定式化した2国2財

のもとでの完全特化と純粹交換經濟の価格調整という枠組みは、のちにマーシャルやエッジワースによって数学的に洗練され、現代に至るまで貿易論の習慣的な思考パターンとして受け継がれている。J.S.ミルの「解決」は問題のすりかえでしかなかったが、やがて 19 世紀末の限界革命に道を開き、その後の経済学全体の発展方向を大きく決めてしまった。塩沢はこの転回をヒックスの表現を借りて、「Plutology (富の学=生産の学) から Catallactics (交換の学) への視点の転換」と特徴づけている。

IV. リカードウ貿易論に残された問題

こうした議論の延長上で到達し得るひとつの問題は、「『原理』第7章でリカードウは『比較優位の原理』を展開したのか」という問いであろう。

リカードウは「比較生産費」という語を用いたこともなければ、「比較優位」という語を貿易にかんして用いたこともなかった。「4つの数字」を含む数パラグラフを単独で取り出したとしても、リカードウは「貿易以前」の状態（アウトタルキー）を想定しておらず、すでに実行されている貿易を分析している。そこでは貿易パターンも交易条件も所与である。ラフィンや行沢の解釈にもとづいて「4つの数字」を理解すれば、たしかにこの設例が「比較優位の原理」に矛盾していないことを示すことはできる⁴⁾。しかし、今日成立している「比較優位の原理」の知識を外挿することなしに、原文の叙述だけを読解して、リカードウがこの原理を提示するためにこのような数値例を設けたと解釈することが可能だろうか。

さらに、ファッカレロが示したように第7章全体ないし『原理』全体に視野を広げれば、リカードウが一貫して分析対象としているのはマイクロ主体による貨幣的交換であり、「比較優位の原理」によって国と国の間の貿易フローが決定されるという説明はリカードウの叙述に即しても妥当しない。

以上の考察から、「比較優位の原理」はリカードウが『原理』第7章で展開したものではなく、リカードウ以後の理論家たちの議論から生み出されたものであるという仮説を導き出すこともできよう⁵⁾。

また、塩沢が示したように、「比較優位の原理」で説明できる「2国2財」のケースは特殊ケースにすぎず、一般的には「比較優位の原理」にかかわりなく国際価値（賃金率体系と価格体系）を決定することができるのであれば、リカードウ以降今日まで「比較優位」を中心概念として展開されてきた貿易理論史は、「2国2財」という特殊ケースに誤って注意を集中し、しかも分析手段が限定されていたがゆえの、長い回り道でしかなかったという見方すら成り立つかもしれない。

しかしながら、最後の論点は、「理論」と「学説史」をどのように関連づけるかというより高次の問題を孕むものでもあろう。

表1 ヴァイナー

財1単位の生産に必要な労働		
	クロス	ワイン
イングランド	100	120
ポルトガル	90	80

(出所) Viner(1937), p.445 の表より作成。

表2 リカードウ『原理』第7章

現実に交易される特定量の財の生産に必要な労働 (人/年)			
	X単位のクロス	Y単位のワイン	貿易利益
イングランド	100	120	20
ポルトガル	90	80	10

(出所) *Works I, chap.7* 文中の数値より作成。

表3 表2を労働投入係数表示に改めたもの

労働投入係数=財1単位の生産に必要な労働 (人/年)		
	クロス	ワイン
イングランド	$100/X$	$120/Y$
ポルトガル	$90/X$	$80/Y$

(出所) 表2より作成。

注

1) ラフィンによる新解釈と本質的に同じ内容の理解を、1970年代という早期に提起していたのが行沢健三であった(行沢 1974, 1978)。行沢の業績をめぐる議論が主として日本国際経済学会を基盤として展開された事情もあり(森田 1988, 吉信 1991, 1997, 田淵 2006)、わずかな機会を除いて(たとえば、野口 1996が挙げられる)、日本の学説史研究者、ましてや海外の研究者に広く紹介されたとは言いがたい(Senga *et al.* eds. 2017 chap.4を参照のこと)。

2) ファッカレロがこの読解を提示する前提として、リカードウの叙述が論理的に整合しているとすれば、という留保が付されている点に注意が必要である。

3) さらなる議論の展開については、Shiozawa *et al.* eds. 2017, chaps. 1 & 7も参照。

4) 表3において $(100/X)/(120/Y) < (90/X)/(80/Y)$ が成り立つ。

5) 久松 (2016a, b)は、リカードウ自身が「比較優位の原理」を提示したことを否定していないが、他方で、トレンズがこの原理の優先権を主張したことにより標準的解釈が普及したと論じている。

参考文献

- 塩沢由典 (2014) 『リカード貿易問題の最終解決—国際価値論の復権』岩波書店。
 田淵太一 (2006) 『貿易・貨幣・権力—国際経済学批判』法政大学出版局。
 森田桐郎編著 (1988) 『国際貿易の古典理論—リカードウ経済学・貿易理論入門』同文館。
 野口旭 (1996) 「古典派国際貿易論研究の諸潮流」『経済学史学会年報』34、97-104。
 久松太郎 (2016a) 「デイヴィッド・リカードと『比較優位の原理』——その先駆者とその後の展開」『国民経済雑誌』第214巻第5号。
 久松太郎 (2016b) 「ロバート・トレンズと比較優位の原理」『国民経済雑誌』第214巻第5号。

- 行沢健三 (1974) 「リカード『比較生産費説』の原型理解と変型理解」『商学論纂』(中央大学) 第15巻第6号、森田編著(1988)所収。
- 行沢健三 (1978) 「古典派貿易理論の形成——リカードとミル父子」行澤健三・平井俊彦・出口勇蔵編、出口勇蔵古希記念論文集『社会科学の方法と歴史』ミネルヴァ書房、所収。
- 吉信肅 (1991) 『古典派貿易理論の展開』同文館。
- 吉信肅 (1997) 『国際分業と外国貿易』同文館。
- Chipman, J. S. (1965) “A Survey of the Theory of International Trade Part 1: The Classical Theory,” *Econometrica*, Vol. 33, No. 3, July.
- Faccarello, G. (2015a) “A Calm Investigation into Mr Ricardo’s Principles of International Trade,” *The European Journal of the History of Economic Thought*, Vol. 22, No.5, 754–790. It will also be published as chapter 6 in Senga *et al.* eds. (2017).
- Faccarello, G. (2015b) “Comparative Advantage,” in H. D. Kurz & N. Salvadori eds., *Elgar companion to David Ricardo*. Cheltenham: Edward Elgar.
- Maneschi, Andrea (2004) “The True Meaning of David Ricardo’s Four Magic Numbers,” *Journal of International Economics*, Vol.62, Issue 2, 433-443.
- Mill, John Stuart (1844) *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, London: John W. Parker.
- Mill, John Stuart (1848) *Principles of Political Economy*, London: John W. Parker, reprinted in 1973, New York: Augustus M. Kelley.
- Ricardo, David (1951-73) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols., edited by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ruffin, Roy J. (2002) “David Ricardo’s Discovery of Comparative Advantage,” *History of Political Economy*, Vol. 34, No. 4, 727-748.
- Ruffin, Roy J. (2005) “Debunking a Myth: Torrens on Comparative Advantage,” *History of Political Economy*, Vol. 37, No. 4, 711-722.
- Samuelson, Paul A. (1969) “The Way of an Economist,” in Paul A. Samuelson ed., *International Economic Relations*, London: Macmillan, reprinted in Robert C. Merton ed., *The Collected Scientific Papers of Paul A. Samuelson*, Vol. 3, Cambridge, MA.: The MIT Press, 1972.
- Senga, Shigeyoshi Masatomi Fujimoto and Taichi Tabuchi eds.(2017), *Ricardo and International Trade*, London: Routledge.
- Shiozawa, Yoshinori, Toshihiro Oka and Taichi Tabuchi eds. (2017) *A New Construction of Ricardian Theory of International Values: Analytical and Historical Approach*, Tokyo: Springer.
- Sraffa, Piero (1930) “An Alleged Correction of Ricardo,” *Quarterly Journal of Economics*, Vol.44, No.3, 539-545.
- Viner, Jacob (1937) *Studies in the Theory of International Trade*, reprinted in 1955, London: George Allen & Unwin.